

## 11 うめ

### 地域慣行基準

#### 【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	20	

#### (1) 特徴及び吸肥特性

うめは浅根性の果樹であり、その根の**耐干性、耐湿性はともに弱く**、酸素要求度が大きい。そのため、土層が深くて**排水良好な土壌**で生育がよい。土壌反応に対しては、 $\text{pH}(\text{H}_2\text{O})$  4.5 以下の強酸性土壌では、生育が極めて不良となる。**適正土壌  $\text{pH}(\text{H}_2\text{O})$  は 6.5 程度の微酸性**である。

一方、うめは樹勢が強く粗放な栽培に耐えるので、栽培園地はとかく無中耕となり、更に雑草草生に移行することが多い。また、たい肥などの有機物は十分な量を施用されていないのが現状で、土壌が悪化しやすく、樹体養分状態はバランスを欠き、耐寒性が低下し枝幹性病害の発生誘因となりやすいため、**適切な土壌管理**を行うことが大切である。

窒素施肥量は土壌、樹齢、環境条件によって異なるが、試験例が少ないので、施肥基準量は養分吸収量からの理論的施肥量を基に、今までの施肥実績から適量を推定している。一例として鈴木らの報告(昭和40年)によれば、**年間に吸収される窒素成分量は 10a 当たり 7.5 kg**であり、これを基礎として試算したところ、**10a 当たりの窒素施肥量は 16.8 kg**となった(品種:「南部1号」、8年生、収量1,165 kg)。

施肥時期は、果実の生育期間が比較的短いので、果実肥大のための追肥の必要性は少なく、収穫期までの必要な窒素を**11月に基肥**として施用し、**収穫後の8月に礼肥**を施用する。ただし、品質面から玉肥を必要とする場合は、5月に少量の窒素を施用してもよい。

施肥配分は、**基肥時として落葉後 11月に年間施肥量の 70%**を施し、新梢、新根の発育と果実肥大期に利用されるようにする。**残りの 30%は礼肥として施用**する。ただし、うめは極めて浅根性であるため、乾燥期の礼肥は根を傷めるおそれがあるので2回に分けて施用する。1回目は枝の状態をみて新梢伸長が停止した後、降雨のあるときに行う。

また、玉肥を施用する場合は収穫前の5月に年間施肥量の15%、収穫後に礼肥として残りの15%を施す。